

瀋陽の安部公房

—作家となる以前の執筆活動を中心に—

Kobo Abe in Shenyang
—His Early Days in Manchuria before becoming a Professional Novelist—

木村 陽子
Yoko KIMURA

Keywords : Kobo Abe. Manchuria. Repatriation. Oral History

キーワード : 安部公房 満洲 引き揚げ オーラル・ヒストリー

はじめに

本研究は作家・安部公房（1924-1993）が職業作家となる（1948-1949年）以前の、主として満洲時代（1925-1946年）の年譜的事実について、その時期の公房を知る近親者（弟妹、友人等）からの証言および新資料に基づき書誌未載事項を中心に明らかにしたものである。具体的には、小説家であった母のこと、弟妹の証言による幼少期の安部の家庭内での挿話、小学校時代にまで遡られる安部の創作活動の開始とそのきっかけ、高校時代の旺盛なる創作活動の様子、敗戦前の安部を知る二人の女性による証言、敗戦後の瀋陽で安部が日字新聞の文芸欄記者をしていた可能性などについて論証する。

1960年代以降の安部公房、とりわけ代表作『砂の女』（新潮社、1962年）の映画化（1964年、カンヌ国際映画祭審査員特別賞受賞）により「KOBO ABE」の名が世界に知られるようになって以降の彼には、作家が自らの出自や経歴について語るという行為を忌避し、半ば確信犯的に経歴を詐称するような習癖があった。その理由を、安部は自筆年譜の冒頭でこう述べている。

人間は誰でも、外部の経歴のほかに、内部の経歴というものを持っている。そして、大事なものは、むしろ内部の経歴のほうだろう。しかも、この二つの経歴が、単純な函数¹⁾ 関係にあるという誤解のために、しばしば不幸を招きがちなものだから、出来れば外部の経歴のことなど、忘れてしまったほうがよい。とりわけ、作家は、すでに作品という、ごまかしようのない経歴を公表してしまっているのだし、それ以外の経歴については、よけいに沈黙を

まもるべきではあるまいか。外部の経歴などを手掛かりに、精神分析されるなどという屈辱に、甘んじている必要はすこしもないはずである。それに、もしもその内容に必然性があり、責任がもてるなら、作家はどんな嘘だって、許されているはずだ。いや、それどころか、嘘をつく義務を課されていると言ってもいいかもしれない²⁾。

こうした事情から、生前の安部自身によって書かれた自筆年譜では職業作家となる以前、特に彼の幼少期から青春期に位置する満洲時代の記述量が乏しく、誤記も散見する。その影響を受けてか、先行研究自体は豊富にありながら、年譜的事実の研究が著しく停滞してきた観が否めない。もちろん、その時期の安部の事績に言及した先行論もあるが、自筆年譜自体に誤記が多いこともあり、いまだ検証が不十分であることがわかった。

そうした研究史の間隙を埋める目的から、筆者は近親者の多くが存命中だった2005年から6年にわたって聞き取り調査を行ったが、証言してくださった方々の多くがすでにこの世を去った今日、当時の証言テープや寄贈された資料（書簡、日記、手記、アンケートへの回答など）の検討が急務となっている。本研究では、それらの一次資料に基づき、作家自身が生涯言及しなかった職業作家となる以前の安部公房の動静、および当人の証言とは異なる安部のデビュー以前の制作状況について論及する。

1. 小説家だった母

のちに作家安部公房（あべ・こうぼう）となる本名安部公房（あべ・きみふさ）が、安部浅吉と妻ヨリミとの間の長男として誕生したのは1924（大正13）年3月7日、東京府北豊島郡滝野川町（現東京都北区）においてだった。

父母はともに北海道石狩国上川郡東鷹栖村（現旭川市東鷹栖町）に生まれた富裕な地主階層であり、浅吉は満洲奉天市（現中国東北瀋陽市）の南満医学堂奉天医院・小児科に勤務する医師だったが、当時は東京国立栄養研究所に出向中だった。浅吉26歳、ヨリミ25歳。

このとき、ヨリミは駆け出しの女流作家だった。安部の小学校時代の担任教師だった宮武城吉によれば、生前のヨリミの発表作は「三編」³⁾、現時点で稿者が確認できているのは単行本で2作だが、どちらも国会図書館に所蔵されている。一方は安部ヨリミ著『スフィンクスは笑ふ』（異端社、1924年3月）、他方は安部頼実著『光に叛く』（洪文社、1925年3月）。ヨリミは1年に1冊ペースで単著を発表していたようだが、「ヨリミ」「頼実」と名前の表記が異なっていることについて、公房の実妹である福井康子は、母親の戸籍上の名前はカタカナだったが、晩年よく習字のときに「頼実」の字を用いていたと語っている⁴⁾。

1924年4月2日の「読売新聞」（朝刊、4頁）によれば、東京女子高等師範を卒業間際に「社会主義の何ものであるかを研究しようとした」ヨリミは、「赤瀾会」講演のビラを学内の掲示板に貼ったことを理由に退学処分となったが、家庭の妻となった後にも「文芸、社会運動に

対する研究の手を少しもゆるめ」ず、25歳で「若き血の燃えたぎった男女の戦いを描いた」『スフィンクスは笑ふ』を生んだのだという。「久しく新しい女性の名による創作を見なかったが突如としてここに一人の女性の作になる長編小説が出版されることになった」という一文からも、ヨリミが若き女闘志の登場として当時メディアから歓迎されていたことが窺える⁵⁾。

続く『光に叛く』の出版を報じた1925年4月11日の「読売新聞」（朝刊、7ページ、書誌未載、写真）では、ヨリミの人となりと近況が次のように紹介されている。



長編小説『光に叛く』を先月中旬、弘文舎（ママ、正しくは「洪文社」）から自費出版した安部頼実さんは、栄養学を研究している安部浅吉氏の夫人で、北海道の旭川に生れ、女学校を卒業してからお茶の水の女子高等師範に学んだが、北海道の美しい自由の天地にはぐくまれただけに型にはまった、そして自己を出す事を極度に制限しなければならない今の教育者になるのをきらい、三年で退学して、再び旭川に帰り専心文筆に親しみそこで完成されたのが『光に叛く』であった、（中略）今では一人の小さい坊ちゃんのお母さまですが、人を使ううるささからのがれて、一人で一切家庭の事をしながら創作をつづけているが、近く満洲の方へ行かれる事になっている、そして又異郷の地に変った題材のものを書いて来たいと頼実さん自身も云っていた⁶⁾

どちらの記事も写真つきで大きく取り上げられ、メディアの関心の高さを窺わせるが、特に後者の記事で注目されるのは、『光に叛く』刊行直後のヨリミが奉天に渡ってから創作を続ける意思をもっていたということである。続く記事のなかで、ヨリミは『光に叛く』に託した自らの思いを次のように述べている。

私はこの小説を恋を失った人、貞操を失った人に読んで頂きたい、失恋をさせた人、貞操を奪った人に読んで貰いたいのです。私は貞操によって、あまりに女は苦しまされ過ぎはしないだろうかと思うのです。貞操は女の落て行く地獄の扉だ。どれ程に多くの若い女がその開きやすい扉の中へ埋没して行く事でしょう。男性の為に幾十万の芸娼妓が飼われてあるのに彼の妻たるべき、良家の娘の、処女であるか否かが問題にされるその相互に屈辱的な対照を、私は指摘せずにはいられないのです⁷⁾

「主婦之友」1923年2月号の特集「恋愛と貞操号」にも見るように、1920年代前半には既婚・未婚問わず女性の貞操問題が広く社会の関心事となり、中でも「読売新聞」は、当時この問題を社説や知識人の寄稿のかたちで頻繁に取り上げていた。ヨリミの著作への当紙の注目もその延長線上にあったと思われるが、記事を読む限り順風満帆そのものに見える彼女の小説家

時代について、安部の小学校時代の同級生だった赤松和子は次のように証言している。

安部公房さんは小学校時代とても作文がうまかったの。でも安部さんのお母様が昔小説家で、その当時とても苦労したらしいの。大人になってから安部さんから伺った話では、僕の母は宮本百合子と同じ歳で、作家を目指していたけれど挫折した。だから、僕が作家になりたいと言いついたら困るので、私たちの担任の宮武先生にお願いして、公房さんの書く作文を決してほめないで欲しい、ほめて本人をその気にさせないでくれ、小説家になりたいなどとバカなことを言い出さないように貶してくれと頼んでいたそうです⁸⁾。

1924年当時の宮本百合子（当時は中條百合子）といえば、ある種〈文壇アイドル〉的な若手女性作家だった。1924年6月1日の「読売新聞」記事、「婦人内閣が出来たら」（朝刊7ページ）のなかで、百合子は以下のように評されている。

こんなのが好きでしょうと、一読者から投書がありました。◇首相 井上秀子（日本女子大学と日本平和協会という新婦人の絶対多数党の首領ですから）◇外相 芦田ふみ子（美しくて社交にたけています。外務省の芦田均夫人ですが独り立ちでも立派なものです）（中略）◇文相 中條百合子（智的でもあり感情も円満、婦人がこの人の様に教育されれば申分がない）

そのような「婦人」として「申分がない」百合子と、デビュー直後から何かにつけ比較されたとすれば、ヨリミにとってはさぞ重荷であったにちがいない。ともあれ、『光に叛く』出版の直後にヨリミは浅吉・公房とともに奉天に渡り、以後小説を発表することは生涯なかった。そればかりか、妹・康子によれば、若いころ小説家であったことや学生時代の武勇伝などを、子どもたちには一切語らなかったという。康子は次のように話している。

母は、若いころ自分が小説を書いていたことを家族には一切話しませんでした。むしろ「国文科になど進学せず、医学部に行って医者になればよかった」と後年よく言っていました。引き揚げ後、北海道で貧乏して田畑を耕したことは母にとって本当に大変なことだったので、もし医学部に行っていたらこんな苦労はしなかったのにとこの思いがあったのだと思います。母は、若いころ進歩的な考え方を持っていましたが、私が一時期、学生運動にのめり込んでいたことを不安に思っか、自分の若いころの話を一切話しませんでした。でも、私が大学生のときに、外部から母の若いころの話を聞いたんです。それで、本当にそうなのか尋ねてみると、いろいろ武勇伝のようなことが母の口から語られました⁹⁾。

2. 執筆開始の時期

ところが、〈小説家にはしたくない〉というヨリミの願いとは逆に、二人の息子たちは一直線に文学へと引き寄せられていった。公房の3歳下の実弟・井村春光によれば、自分も札幌医科大学進学前後までは小説家を志し、同人誌に詩を寄稿したりしていたが、兄公房から「お前には才能がない、小説家にはおれがなるから、おまえは父母の意思を継いで医者になれ」と諭されたという¹⁰⁾。

他方、安部を文学へと導いた功労者の一人が、奉天千代田小学校時代に6年間持ち上がりの担任だった（途中の1年間を安部は旭川で過ごしている）宮武城吉である。安部らが受けた宮武学級での速読多読教育をベースとした英才教育についてはすでに詳述したので割愛するが¹¹⁾、ここでは学級内での教育とは別に、宮武が課外授業的に行っていた文章教室について特筆しておきたい。

前掲、赤松和子は次のように証言している。



宮武先生は私の家（写真）で月に1回、日曜日に1日ばかりで文章教室を開いていました。そこには千代田小学校で秀才だと言われていた子どもたちばかりが1年から6年まで、全部で6-10人くらいいたでしょうか。先生から選抜されて文章を書かされました。私も安部くんも、その文章教室に出ていました。小学校低学年の時にはじまり結構長く続いたように記憶し

ています。

私は子どもなりに安部くんの能力を認めていました。奉天毎日新聞の夕刊の欄に小学生の作文の投稿欄があったのですが、そこによく安部くんは掲載されていました。投稿するのはいつも宮武先生です。私も何度か載ったことがあります。なので「彼はなかなかやるじゃないか」と思っていました。安部くんは、お母さまが宮武先生に「絶対にくさして下さい」と頼んでいたというけれど、私の目から見る限り、その後も宮武先生が安部くんを特別ほめなくなったとは感じませんでした¹²⁾。

小学校時代の安部公房の創作については宮武学級の1人、辻公平も記憶しており、「土曜組で機関誌発行。安部くんが当時既に名作を発表。マンガは私が発表した」¹³⁾と同窓会誌に書いている。「土曜組」とは宮武学級内での班の名称であり（月曜日には月曜組がすべての当番を担う）、「機関誌」とは回覧ノート形式のものだったという。

他方、親に隠れての安部の小説執筆は中学・高校時代にも継続された。特に、東京の成城高校に単身進学して以降、安部は親元を離れた解放感もあり、創作三昧の日々を送るようになったという。安部の中学時代の級友だった緒勝元の7歳下の妹、原田静子は、成城高校に進学して以降の安部公房を次のように回想している。

中学時代の安部さんはあまりうちにはお越しになりませんでしたが、むしろ内地の学校（引用者注、成城高校）に通うようになってから、奉天に帰省するたびに自宅にも戻らないで我が家に直行するようになりました。特に私が朝日高等女学校の1、2年生のころ、安部さんが東大医学部進学前後の2年間は、頻繁に我が家にきていました。あまりに安部さんが自宅に戻らないので、いつも弟の春光さんが、そろそろ帰ってこいと親がっていると迎えにきていました。（中略）

よく安部さんは我が家で小説を書いていました。それで書き終わると、いつも私に「読んで」とか「清書して」と依頼してきました。私は、「なんで私が…」と思いつつも、いつも清書してあげていました。特に東京から帰省すると、向こうで書き溜めた小説を必ず「読んで」といって渡してきました。小説の内容は細かく覚えていませんが、後年安部さんが書いたような観念的な内容のものではなくて、もっと若い男女が出てくる、ごく普通の恋愛小説だったと思います。その中には、私がモデルではないかと思われるような女性が描かれていたこともありました。安部さんは、よく私や兄に、「どうしても小説を書きたいから医学部をやめるんだ」といっていました。終戦よりも前のことです。結局は、引き揚げ後に弟さんが医学部に進まれることになったので、心おきなく小説家の道に進まれることになりましたが¹⁴⁾。

注目したいのは、安部が実際に小説を書き始めた時期が、後年彼がインタビューなどで証言した時期よりもかなり早かったということである。たとえば、1968年3月「三田文学」に掲載されたインタビュー記事（「私の文学を語る」）で、安部はインタビュアーだった秋山駿や「三田文学」編集部の質問に対して次のように答えていた。

〔編集部〕学生時代に小説書いていらっしゃいましたか。

〔安部〕書いてなかった。

〔編集部〕どうして書く気になったのですか。

〔安部〕わからないな。

〔編集部〕それまで、なにを読んでいらしたのですか……。

〔安部〕僕は文学青年じゃなかったから。

〔編集部〕というと……。

〔安部〕とにかく川端康成の名前も知らないようなありさまでね。

〔秋山〕すると、その頃なにをお読みになっていたのですか。

〔安部〕よく分らないけどヤスパースなんかね。

〔秋山〕それは精神病理学なんかの本ですか。

〔安部〕哲学の本と、数学の本かな。精神病理学も好きでしたね。(中略)

〔秋山〕最初にあの小説(引用者注、「終りし道の標べに」)をお書きになったときは、では書くという意志だけの強行のような……。

〔編集部〕それをなぜ、たとえば小説という方法をとってやろうという気におなりになったのですか。

〔安部〕わからないのですよ。(笑声)¹⁵⁾

冒頭で述べたように、1960年代以降の安部公房には、作家が自らの出自や経歴について語るという行為に対しての強固な懐疑の念があり、半ば確信犯的に経歴詐称を行うようなところがあった。しかし、原田静子の証言にも明らかなように、実際の安部は少なくとも高校時代(1940年4月-1943年9月)には旺盛な執筆活動を開始している。東京での一人暮らしで親の目を気にする必要がなくなり、それまで抑えつけられていた創作への欲求が一気に高まったものと推測される。

そしてその思いは、東京帝国大学医学部に進学するころには、「どうしても小説を書きたい」と友人たちに漏らすまでになっていた。しかも前掲、赤松和子、辻公平ら小学校時代の同級生たちの証言に基づけば、安部の創作活動は、実に小学校時代にまでさかのぼられるのである。

3. 少年期の安部公房

さて、いまだ少し少年期の安部公房について、近親者たちの証言に基づき明らかにしていきたい。

小中学校が安部公房といっしょで(奉天千代田小学校、奉天第二中学校)、当時の彼をよく知る児玉久雄によれば、中学に進学した安部は、文学に勝るとも劣らない情熱で音楽に傾倒するようになったという。児玉によれば、安部はクラシック音楽、特にベートーベンやシューベルトやショパンを好んで聴き、音楽部に所属し、ハーモニカバンドでギターを担当していたという。¹⁶⁾

当時、奉天第二中学で発行されていた校友会誌「砂丘」創刊号(1940年3月発行)を確認すると、同中学に校友会の一部として音楽部が設立されたのは1939年春のことで、このとき安部はすでに4年生だった。「四修」(4年で中学を修了すること)だった彼にとっては中学最後の年で受験勉強も大変だったはずだが、その合間を縫い部内で結成されたハーモニカギター四重奏のギター担当として練習に励み、部の創立から半年後の1939年12月15日には陸軍千代田分院に慰問コンサートに出かけている。「砂丘」誌によれば、当日の曲目は「赤い翼」(ミルズ作曲)、「娘道成寺」(詳細不明)、「ラ・パロマ」(イラディエール作曲)で、「音楽部創立半

年にしては立派な出来ばえであった」という。

妹・康子は、当時の公房ら家族の様子を次のように語っている。

私と兄は13歳離れているので、私が2、3歳のころ、兄はもう奉天第二中学校に通っていました。ある日、兄が学校に行っている間に、母と2人で兄の勉強部屋にあった蓄音機で童謡のレコードをかけて喜んでいたら、そこへお兄ちゃんが帰ってきて「あ、またそんな下品な不潔な音をたてている！ 早く消えてなくなれ！」と言って私たちを追い出して、その後でツイゴインルワイゼンをかけて「ああ、これで空気がきれいになった！」なんて言っていました。

私にとって、才能豊かで器用な兄はずっと憧れでした。小さいころ、お兄ちゃんがミッキーマウスの絵を描くのが得意で「描いて、描いて」と付きまとうと、「これを持って、とっと消えてなくなれ！」と言われたりしましたが、それでも描いてもらうと嬉しくて。それで、その絵をもらって階下に降りようと思っていると、母が階段を上がってきて、兄が「お母さま、康子が消えたんだよ！ 消えてなくなっておまじないしたら、いなくなっちゃったんだよ」と言うので、「私、ここにいる！ いる！」と言うと、母まで一緒になって「あら、どうしたのかしら。ダメじゃないの、消しちゃったら」なんて2人にからかわれたりして（笑）。

それから、奉天の家には父がハルピンで購入した影絵芝居の人形が4体くらいあって、かなり精巧にできた高価なものでしたが、私がまだ小さかったころ、ちょうど家にお兄ちゃん（公房）と春ちゃん（春光氏）の両方がそろっていたので遊んでほしくて、「影絵芝居をしよう」とねだると、2階に大きなベランダがあって、兄たちが部屋を真っ暗にして「康子は部屋の中にいなさい、僕たちがベランダから人形劇をしてあげるから」と言われたんですけれど、私は怖いから嫌だと言いました。すると、「じゃあ、康子がベランダに出なさい、僕たちが家の中で人形劇をしてあげるから」と言われ、結局は泣かされて人形劇もしてもらえなくて（笑）。そんな風に、兄には子どものころすごく可愛がってもらった記憶があります。父が私の小さかった時に亡くなったので（引用者注、父浅吉は康子が8歳の時に逝去）、自分にとっては父親代わりのような人でした¹⁷⁾。

他方、公房の3歳下の弟・春光は、彼が3歳の時に母ヨリミの実家である井村家（北海道旭川郡鷹巣村）に単身預けられ、5歳の時に正式に養子縁組して井村姓となった。春光が預けられた時、井村家は祖父母の2人きりで、祖父はすでに脳出血で病床にあり、彼が小学校5年生の時に他界した。その後、祖母と2人暮らしになったが、家族を恋い慕う気持ちが募り、ついに中学1年の夏休みに一念発起して奉天の生家に戻り、試験を経て奉天第二中学校に編入学した。

春光は、兄公房について次のように語っている。

中学1年の夏に戻った時、公房は入れ違いで内地の成城高校に進学していましたが、1年ほどして肺浸潤を病み奉天に帰郷しました。長く一緒に育っていなかったのも、なんとなく遠慮がちではありましたが、実際ひとつ屋根の下で暮らすうえでは、人の気持ちを汲むのに長けた人で溶け込みやすい雰囲気を経験した兄の方で気を遣って作ってくれるのがうまかった。鬼ごっこなんかに付き合ってくれまして、わざと捕まえやすく逃げてくれるんです。兄は生涯を通してそうでしたが、面と向かって作家・安部公房として対するのと、家の中で家族に対して見せる態度では、こんなに人間というのは変わるものかと思うくらいにまったく異なっていた人でした。家族に言わせれば、兄はとても気が弱い。家族の前ではいたって素直でした。弱い人だから逆に外では強気なことを言う。要するに、長男坊気質だったんです¹⁸⁾。

単身、東京の成城高校に進学してのち、ほどなくして公房は雨天での軍事教練で風邪をこじらせ肺浸潤にかかり、休学して奉天の実家に戻ることになった。他方、前掲の春光の証言を受けて、康子は次のように語っている。

兄が成城高校時代、肺浸潤で1年ほど内地に帰ってきていた時、親からお兄ちゃまの部屋に入っちゃだめだと言われていたのに（当時、家族は公房を「お兄ちゃん」と、春光を「しゅんちゃん」と呼んでいた）、一緒にトランプとかをして遊んでもらったことを覚えています。

そのころの兄と鬼ごっこをしたって春ちゃんが言っているの？ 絶対無理だったと思うけれど（笑）。高校時代に帰省した時には本当に病気でいつも寝ていました。小さい時、夏になるとジャラントン（中国モンゴル自治区フルンボイル市）に家族で行っていました。兄が肺浸潤で奉天に戻っていた時、母と兄が2人でジャラントンに静養に行っていたという話を聞いたことがあります。当時の兄の病状は、死にそうというほどではなかったけれど、それなりに重病でした。兄は下に降りて一緒にご飯を食べてはだめだと言われていました。また、よく兄は本を読んでいたのも、母が「そんなに長時間、読んではだめだ」と薬の時間や注射の時間に2階に上がっていつかは注意していました。感染するといけなないので、兄の部屋を覗いてはだめだと母が私に言っていました。どうしても覗きに行きたくて、覗きに行くと「なんだよ」とか言われて、残っているリングを「食べる？」と聞かれたこともありましたが、感染すると嫌だと幼心にも思って食べませんでした¹⁹⁾。

春光もまた、この時期の安部が部屋で1人、黙々と読書に耽っていたことを証言している。安部家のリビングの書棚には、岩波の世界文学全集をはじめとした多くの文学書がそろっていた。これを安部も春光もよく読んだ。そして、1年後、肺浸潤が完治した安部は再び東京に戻るや旺盛な創作活動を開始し、成城高校を戦時下、在学年短縮で繰り上げ卒業し、東京帝国大学医学部に進学するころ（1943年9月）には、「どうしても小説を書きたい」と周囲の友人に

漏らすまでになっていたのである。

*

*

1944年12月、内地東京の食糧難に耐えかねた安部公房は、同じく奉天から東京工業大学建築学科に内地留学していた中学時代の親友・金山時夫と連れ立ち、新潟から船で現在の北朝鮮の清津港に渡り、図們（ツォーメン）（中国吉林省延辺朝鮮族自治州）を經由して新京（中国吉林省長春市）に到着、ここで金山とは別れて1人奉天の実家に戻った。当時のことを、春光は次のように回想している。

公房が帰郷した理由についてどのように説明していたかは記憶がありませんが、うまいこととして帰ってきたものだと感じていました。東大に進学しているはずの公房が奉天にいるということを、近所に見とがめられることはまずいことだという意識は、当人にも家族にも多少はありましたが、でも当時の奉天はまだ平和ボケのようなところもあって、人の目も実際にはそれほどうるさくなかったので、兄は父と一緒に往診にも出かけていました。そのころ、奉天は本当にまだ平和で、夕飯どきには家族そろって食卓を囲んでいました。

私は1945年4月に奉天工業大学に進学しました。理系のほうが赤紙がこないという理由からのみの進路選択でした。その甲斐もあり軍隊経験なく終戦を迎えました。クラスは50人弱いたのでしょうか。そのうち半分くらいは終戦間近でも大学にきていましたよ。でも、いずれ遠からず赤紙がくるだろうと考えていましたから、生き延びるということは想定もしていませんでした。だから将来の職業選択だとか受験勉強なんて思い煩うこともありませんでした。「なるようにしかならない」という捨て鉢な、暗澹たる気持ちで、むしろ現実逃避のように読書に耽っていました。世界文学全集、とりわけロシアの現代文学に私は惹かれました。公房も同じで、互いが遠からず死を覚悟していたためか、兄弟で熱心に語り合うといったような記憶もなく、個々に自身の部屋で読書に耽るといった感じでした。ですから8月15日は、たとえ敗戦であれ、戦争に行かなくて済んだこと、生き延びたということで、ただただ嬉しかったです。

私たちは生涯奉天に骨を埋める気でいたので、終戦直後には「引き揚げ」などということとはまったく念頭がなく、階級もひっくりかえってしまい、これからどうやって生きていこうかと思案に暮れていました。「引き揚げ」ということが周囲で話題に出るようになったのは終戦から2か月くらい経ってからでした。路上に出ると、中国人や朝鮮人などから日常的に強盗されるようになり、また終戦から1か月も経たずに毎夜市内のあちこちで動乱が起きるようになりました。8月18日の長沼方面（中国人街）の動乱は大変恐ろしく、深夜まで銅鑼や歓声や怒号が響きわたっていました。実際に見に行くようなことは兄も私もありませんでしたが、8月中は毎晩のように騒音を耳にし、身に危険を感じるようになり、もはやここには居られないという思いに徐々に変わっていききました²⁰⁾。

4. 敗戦後瀋陽（旧奉天）での執筆活動

作家となる以前の安部公房の執筆活動について検証するうえで、本稿がとりわけ注目するのは《敗戦後の瀋陽で公房が友人たちと残留日本人のために日字新聞を発行していた》という弟・井村春光の証言である。

それまではむしろ物臭な方だった兄が、終戦後、とつじょ雄弁で行動的な男に豹変したのにはみなビックリしました。兄はしょっちゅう自宅や集会所のようなところで複数の人たちと集まってわいわいやっていました。場所は居留民会や日僑善後連絡総処関連の会議室で、20-30人はいつもいたでしょうか。私は当時それを、しばしば兄の横で見っていました。そのような場で、公房は積極的に発言するタイプに豹変したんです。しかも、最初はみんなでわいわいしていたのが、次第に公房が議論を先導し、気がつくとなつぺんに座っていて、あとは公房の意のままになるといったことがしばしば見られました。よくも悪くも話術がとても巧みでした。突飛なアイデアを思いついては、それを行動に移そうと周囲に働きかけ、成功するように人々を仕向ける、そうした人を動かす能力に兄は大変長けていました。

もちろん本人は必ずうまく行くと信じているんです。そういう思い込みの強さが兄にはありました。また、同世代ばかりでなく、ずっと年長の人に対しても正々堂々と議論を吹かけられるようなところもありました。そのとき話し合われていた話題は、たとえば引き揚げの順番とか、出発の日時であるとか、船がいつ日本の港を発つから葫蘆島につくのはいついつ、それに乗船するためにはいつ奉天を出発したらよいのかとか。荷物は最小限にとどめなければならぬので、傘や合羽などを持つ余裕はないから列車が無蓋貨車だった場合、雨が途中で降ってきたらどうするかとか。日僑善後連絡総処の幹部たちに交じって、公房はそうした議論に参加していました。（中略）

敗戦後の兄は、本当にどこでそんなことを覚えたのだろうと呆れるくらい、口八丁手八丁というか、交渉や取引の能力に抜群に長けていました。当時、公房の小中学校の同級生の多くは大学進学のために内地にいたか、学徒出陣して軍隊にいましたから、終戦後の奉天には彼の昔の同級生はあまりいなかったと思います。むしろ、奉天帰郷後の公房の人脈は、新しく開拓されたものでした。その中で、公房が新聞社の数人と地元の学生たちとの合作で作ったのが「東北導報」でした²¹⁾。

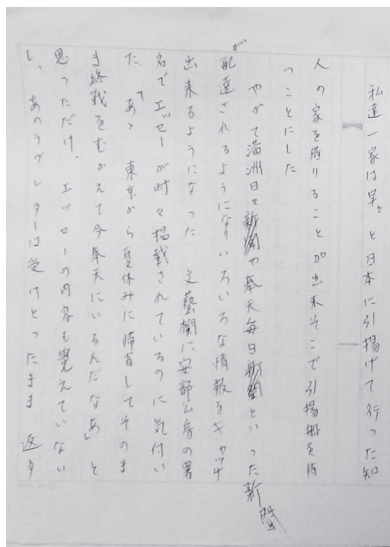
この「東北導報」だが、たとえば福田實『満洲奉天日本人史』（謙光社、1976年）の中では次のように説明されている。

国府軍の代²²⁾となり、元満洲日日新聞および康德新聞の社員たちが中心となり、瀋陽の同社工場を利用し、昭和二年三月一七日より「東北導報」（主幹 孫少校、編集長 山本紀綱）を発行した。日語版の週刊、タブロイド型四頁であったが、五月六日から日刊となっ

た。かくして昭和二二年九月一五日の終刊まで四九八号を発行、部数約三万に及び、日本からの通信が杜絶した日本人にとり、唯一の読物として歓迎された。

ところが、肝心の「東北導報」「青年報」の全容が今日明らかになっていない。「東北導報」の一部は現在国会図書館に所蔵されているが、同館所蔵の「東北導報」には「安部公房」の筆名をもつ記事を確認することができなかった。春光が言及している「青年報」に至っては、今日現存しているかさえ確認できず、「東北導報」「青年報」への安部公房の関与を立証することは現時点では断念せざるを得ない。

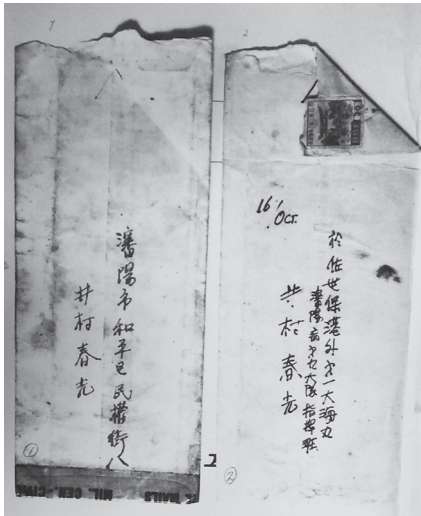
ただし、敗戦後の瀋陽で安部が新聞媒体に寄稿していたということ自体は、赤松和子も証言している。結婚後、夫とともに北満洲の海倫に暮らしていた赤松は、敗戦後、満鉄社員たちのために用意された貨物列車に便乗して父母の暮らす故郷瀋陽に戻った。以下は、当時を回想した赤松の手記（写真）からの抜粋である。



満鉄の社宅の住民の引揚げの日が来た。その貨物列車に私達一家は奉天まで便乗させてもらった。奉天まで昼も夜もわからぬ密閉された貨車の中で何日間すごしたか記憶に無い。(中略) 奉天はがらっと変っていた。浪速通りから春日界限は、着物や家具類あらゆる品々を持ち出し並べたてて売っている日本人と、それを安く手に入れようとする中国人達でごった返していた。父が設計して建てたわが家には中国人の家族が二家族棲みついていた。私達一家は早々と日本に引揚げていった知人の家を借りることが出来、そこで引揚げ船を待つことにした。やがて満洲日々や奉天毎日といった新聞が配達されるようになり、いろいろな情報をキャッチ出来るようになった。文芸欄に安部公房の署名でエッセーが時々掲載され

ているのに気付いた。「あら、東京から夏休みに帰省してそのまま終戦をむかえて今奉天にいるんだなあ」(引用者注、正しくは安部の奉天帰省は1944年12月)と思っただけ。エッセーの内容も覚えていないし、あのラブレターは受け取ったままで返事を出していない事も想い出さない位、心が疲れ切っていた²³⁾。

右の記述には赤松らが瀋陽に戻った日時の記載が欠けているが、彼らの帰省時、すでに瀋陽からの引き揚げが開始されていたことから1946年5月以降であることがわかる。また、赤松の手記では安部が文芸欄に寄稿していたという新聞名が「満洲日々や奉天毎日」だったとされているが、敗戦後の瀋陽（当時は国民政府軍の統治下）では満洲国統治下で用いられていた



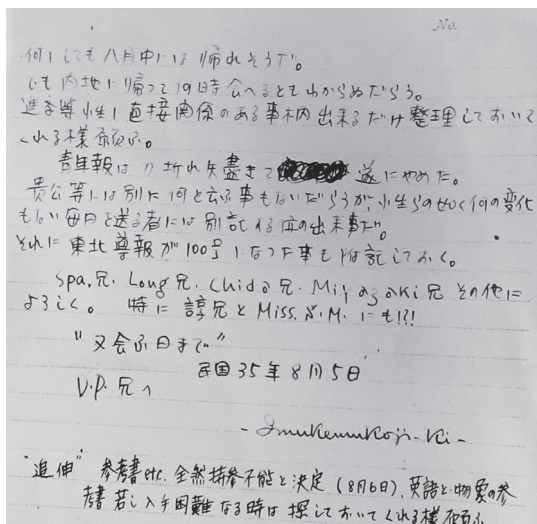
「満洲」や「奉天」の名を口にすることすら厳しく禁じられており、それらの名を掲げた日字新聞を俘虜の立場にあった残留日本人が発行することなど、到底不可能である。

他方、いまひとつ本稿が注目するのは、井村春光が中学時代の親友・鈴木衛に宛てた1946年8月5日の日付をもつ書簡²⁴⁾の中に「東北導報」「青年報」への言及が見られることである。当時、春光はまだ瀋陽市内に公房ら家族（母・妹）とともにいた（父は1945年12月、発疹チフスに感染して他界）。当時、妹の康子が重い肺浸潤を患っていたため、一家は一般人の移送終了後に出航する病院船（第一大海丸瀋

陽病院船・第九大隊指揮班）（写真・右）で帰ることにしたからだ。安部家の帰る船が決定し、瀋陽を出発したのは1946年9月14日だった。

他方、鈴木の方も国民政府統治下の日僑俘遣送事務所の臨時雇いとして葫蘆島に勤務していたため引き揚げが遅れていたが、一般移送の終了に伴い、一足先に日本へ帰国した。その鈴木のもとへ彼の地の井村春光の書簡が届いたのは1946年9月19日だったが、書簡（ノートを切り取ったもの、裏表1枚の2枚相当の内容）には春光の筆跡で「民国35年8月5日」と、封筒裏面（写真・左）には「瀋陽市和平区民権街八／井村春光」と書かれている。以下に、その一部を抜粋する。

D・D兄（引用者注、「D・D」は鈴木の変称）



小生 瀋陽でウロウロしているのに貴公帰国との話で甚だ落胆している。体の調子その他から病人列車に決定した。いつ立つともわからぬ現在だ。（中略）完全に出発準備の完了を見、何もする事なく暮らしている。（中略）読む本も、語る友も、腕を組む彼女も居ない小生の現在 故郷（引用者注、日本）をなつかしむ心で一杯。然し、東北導報等の漠然とした記事からでも生活難の想像以上なる様子が窺はれ一寸淋しい。どうだい、貴公、生に「チャングイパーサイ」（引用者注、「ご主人さまお恵みを」といった意味の中国語）の要領を聞

かなかった事を後悔していないか。明後日は諫山もたつ。総処（引用者注、日僑善後連絡総処）に行く気はもう一寸ない位人間が少なくなった。残る一万人の日僑の一人となって見ると、甚だ祖国なるものの盛衰が我々に非常に影響のある事がシミジミ感じられる。（中略）青年報は刀折れ矢尽き遂にやめた。貴公等には別に何と云う事もないだろうが、小生らの如く何の変化もない毎日を送る者には別記する位の出来事だ。それに東北導報が100号になった事も付記しておく。

書簡（写真）を読む限り、当時春光も何らかのかたちで「東北導報」「青年報」に関与していたように受け取られるが、2009年5月、稿者が当人に確認したところ、関与したのは公房のみで自分は直接にはかかわらなかったとのことだった。

以上の検証から、赤松和子が「時々掲載されている」のを目にしたという安部のエッセイの掲載紙は、井村春光の証言・鈴木衛宛て書簡などとも併せて考えると、「東北導報」、ないしはそれと抱き合わせて発行されていたと推測される「青年報」だった可能性が高いが、現時点では詳細不明と言わざるを得ない。しかし、敗戦後の瀋陽で安部公房が地元発行の日字新聞の文芸欄記者としてエッセイなどを発表していたという事実は、作家・安部公房誕生の前史を論じるうえで特筆に値するだろう。

5. 母子のきずな

さて、冒頭にも記したように、若いころに小説家として世に出たこともあった母ヨリミだが、引き揚げ後に小説家の道を選択した息子公房とのその後について語った、妹・康子の証言を最後に付記しておく。

旭川に引き揚げた後、私は小学校2年生に編入しました。奉天を離れた時が夏だったので、私は冬に履く長靴を持っていませんでした（引用者注、引き揚げ時の持ち物制限のため）。それで北海道ですぐ冬になり雪が降りはじめたので大変でした。担任の小柳先生という人が可哀想だと言って、先生のガボガボの長靴を履いて学校に行きました。1年くらい経ってから配給で長靴が手に入りました。最初の冬は私が学校に行くと、安部君は足が凍っているから1番前に座らせてあげなさいと先生がおっしゃって、しばらく授業が始まっても1人だけストーブの前に座っていました。でも空気のよいところに行ったのがよかったのか、肺浸潤はその後、完治しました。

お兄ちゃん（公房）は引き揚げ後すぐに東京に出ていきましたが、春ちゃんはその後受験をしたりで大変でした。春ちゃんは夏休みには家に戻って手伝いなどもしてくれていましたが、お兄ちゃんの方はほとんど帰って来ませんでした。真知さんと結婚した時に初めて2人で旭川に来ました。その時に春ちゃんも帰省して、何日か家族で久しぶりの団欒を過ごしま

した²⁵⁾。

この時の帰省について、春光は鈴木衛宛て書簡（春光の筆跡で1948年1月11日の日付が記されている）で次のように報告している。

兄貴がheiraten（引用者注、ドイツ語で「結婚」）した事も御報告しましょう。昨年8月頃《俺は一生結婚なぞ……》と言っていた口の下からノーノーとアベックで帰って来たのにはダァー！ナカナカの美人？です。そして12月に卒業したあとインターンをすましたら1人前と言う訳です²⁶⁾。

書面を読む限り、この時の帰省で、安部は家族に医師にはならず小説家として立つつもりであることを報告しなかったようである。引き続き、妹・康子の証言である。

旭川に戻ってからの私と母の暮らしは大変苦しいものでした。母は生まれて一度もしたことのない農業をはじめ、大変な苦勞をして学費を2人の息子に送っていました。母は非常に小柄で、手などもとても皮の薄い華奢な手で、地主の娘で若いころは勉強ばかりしていたような人だったので、とても農業なんてできるような人ではなく、また教員免許も持っていたので近くの学校から先生にならないかと誘いも受けていました。でも学校の先生では2人の息子を医者にはできないからと言って、母は決心して農業をはじめました。

安部家も井村家もどちらも大地主でしたが、農地解放で戦後ほとんど土地はなくなっていました。でもどちらの家もあまりあくどいことをしない良い人たちだったようで、昔の小作人だった人たちが「いくらでもヨリミさんの作れると思うだけ返してあげるよ」、「どのくらい欲しいの？」などと言って大変よく面倒をみてくれました。でも今のように機械で草を取ったりする訳ではないので、田植えのときにはみんな手伝いにきてはくれましたが、母にとって農業は並大抵のことではありませんでした。

米や野菜を作りました。米を作らなければ、2人の息子を医者にするだけの学費などとても捻出できませんでした。ヒツジを2頭、ニワトリを100羽くらい、アヒルやウサギも飼っていました。母が穀物を煮てエサを作ってニワトリに食べさせたので、安部さんのところの卵はすごくいい卵だと普通より高く買ってくれる人もいました。それらはみな兄たちの学費に消え、母も私もニワトリの卵を口にすることはありませんでした。私たちが食べるのはアヒルの卵で、ニワトリの卵よりも大きめで硬く味も落ちました。「ニワトリの卵はお兄ちゃんたちに送ってあげようね」と母が言いました。自由に肉を買ったりもできませんでした。

私はヒツジの世話を担当していて、毎朝学校に行く前に一線道路（引用者注、旭川に通じる一番大きな国道）にヒツジを2頭連れて行って、草を与えて電信柱に括っておきます。学校帰りに戻るとお腹いっぱいになったヒツジが待っています。本当は違法なことだったので

しょうけれど、母1人子1人で頑張っているのだからと周囲の人たちは大目に見てくれました。

朝だけでなく夕方にもヒツジがお腹をすかせるので、また一線道路に繋ぎに行くと10人くらいの子どもたちが「遊ぼう」ってやって来んです。すぐ近くには石狩川があって、その石狩川は急流で毎年何人も子どもがそこで足を掬われて亡くなっていましたが、そこへみんなで行くんです。ちょっと窪みになったような静かな場所がありまして、そこに私がみんなを引き連れて行くと、みんなは裸になって遊びはじめるんです。でも私は遊べません。私はミミズを取ってドジョウやカジカを釣るんです。一緒に釣ってくれる子もいて、帰りにはバケツ一杯になりました。それを持って帰ると、ニワトリが私を見つけてすごい勢いで走ってくるんです。そのままあげるとニワトリがドジョウを喉に詰まらせて目を白黒させて死にそうになりながら喜んで食べるんです。冬には母がそのドジョウやカジカをカボチャか何かと一緒に炊き、それを動物たちに与えていました。そんな暮らしをしながら、兄たちに仕送りをしていたんです。お兄ちゃんが大学を出た頃には母の体が弱りはじめていたので、そのころからお兄ちゃんの方が母に仕送りをするようになりました。

兄は東大を卒業した時に1度北海道に戻ってきて、母に卒業証書を見せて「これが欲しかったんでしょ」と言って渡しました。母は引き揚げ後に北海道で田畑を耕して本当に苦労しましたから、その意味ではあの戦争を潜り抜けて大変な思いをしたからこそ息子たちを医者にしたいという思いも強かったと思います。でも兄が小説家の道を1度選んだ時点で母はそれから先、ごちゃごちゃ言うようなことは一切しませんでした。兄の方も原稿があがると、まず母に「読んで」と言って送っていました。母が兄の家に同居していた時はずっとそうでしたし、私の家に母が移った後も兄は原稿を送り続けてきていました。「砂の女」や「他人の顔」といった代表作もそうです。1970年代前半くらいまではずっと母も私も生原稿を刊行前に読んでいました（引用者注、1973年刊行の『箱男』まで）。私も一緒になって読むのですが、「変な失敗作だったらどうしよう……」と思いながら、ドキドキしながらいつも読んでいました。ねりさんの全集に収録されている「安部公房伝」に「「壁——S・カルマ氏の犯罪」を書いたとき、ヨリミが「見せなさい、直してあげる」と言っていたと、のちに妻真知は、思い出して怒った」という逸話が紹介されていますが、それはまちがいで、母が添削するなんていうことはまったくなく、そこまで出しゃばる人ではなかったです。

母とはいつも一緒にいたので奉天時代の昔話を取りたててした記憶はないんだけど、ただ父が映画をととても好きだったのに一緒に行くのを面倒くさく思って3回に2回くらいしか付き合わなかったことを、後年母は「あ～あ、あんなに早く亡くなっちゃうんなら（引用者注、享年47歳）、全部付き合ってあげればよかった」と話していました。私の夫は母をととても大事にしてくれました。母がどこかへ行きたいようなことをちょっと言うと、じゃあ、次の休みに行こうと母を第一に優先してくれるようなところがありました。私自身も、家族の中で誰か1人だけ助けられるとしたら迷わず母を選ぶような、母に対する特別の尊敬の念を

持っていました。それに比べると、兄は優しい言葉をかけたり、家族を大事にしたりするようなタイプではありませんでしたが、でも兄は兄なりに母のことを本当はとても尊敬していました。2人にはどこか以心伝心で繋がっていたようなところがありました。

母の葬式の時（引用者注、1990年7月逝去）、実は兄はもう体調がかなり悪くて葬式にも出られないほどだったんです（引用者注、公房は1993年1月逝去）。すると兄から電話がかかってきて、葬式に関しては周囲がなんと言おうが康子の家で最後まで居て亡くなったのだから、何が何でもすべて康子のしたいようにするように、真知の言う通りにしなくてよい、と言われました。兄は当時、あっちの病院では癌だと言われ、こっちの病院ではそうではないと言われ、病院同士が対立するといったような状態にあったのですが、その言葉を聞いて私は、「ああ、やっぱりお兄ちゃんは昔どおりのお兄ちゃんだ」と感じました。でも結局は真知さんの言う通りにしました。母自身は密葬に近いようなかたちで福井（引用者注、康子の夫）の家から葬式を出して欲しいと生前に言っていました。でも真知さんは他人の目をととても気にする人だったので、公房の母が死んだのだから新潮社の人も呼ばなければ、とか、いろいろ考えずにはおれない人だったんです。でもその一方で、公房の病状を隠したい気持ちも真知さんにはあったので、あまり大々的にはしたくないようでした。

最晩年のある日、兄から電話がかかって来て「言葉を失ったんだよ」と言われました。私が「でも、しゃべってるじゃない」と言うと、「何を言おうとしても言葉が出ないんだよ」と言い、「康子は本当に駄目だなあ」とも言いました。なので「そうだね、私は文学についても何についても駄目なのよ」と答えると、兄は「春ちゃんはもっと駄目だなあ、なんの役にも立たない研究をして、何の成果も挙げないから駄目だ」と言いました。言葉が思うように出ないようで、ストレートな感情だけをぶつけてくるような感じでした。「明日お見舞いに行こうかと思っているの」と私が言うと、兄から「来ないでいい。みっともない格好を嘲笑うために来ることない」と言われたので、「そんなこと、思うわけないでしょ!」と言うと、「まあ、いいよ、来なくて」と言われて電話が切れました。そういう単純な電話が晩年に2、3度ありました。

私もそうでしたが、春ちゃんも公房のことをすごく尊敬していたと思います。春ちゃんは若いころ詩人になりたいと言っていたことがありましたが、それに対して公房が「お願いだから、1人くらいはお母さまの希望にそって医者になってくれよ」と言って説得したんです。

晩年の公房は小説を書くのが非常に困難で、おそらく母が「もうお兄ちゃま、こんな苦勞しなくていいよ、一緒に天国に行きましょう」と連れて行ったんじゃないかって、そんな風に思うんです。亡くなった後の喧騒の中で、私は「ああ、お兄ちゃんは亡くなって楽になったなあ」としみじみと思いました²⁷⁾。

*

*

以上、本研究では安部公房の年譜的事実について書誌未載事項を中心に明らかにしてきた。

2012年11月、安部が引揚げ時（1946年）に船中で執筆したとされる未発表短編小説『天使』（井村春光宅から発見）が『新潮』誌に掲載され、文学愛好者たちの注目を集めたことは記憶に新しいが、そのことをきっかけとして2013年1月には生前未発表短編10編を含む『（霊媒の話より）題未定—安部公房初期短編集』が新潮社から刊行されるなど、近年、満洲時代から引揚げ前後の安部公房の動静への関心が高まっている。そうした中、多くはすでに故人となった安部の近親者たちの証言の検証もまた、よりいっそう重要性を増しており、引き続き録音テープや書簡・手記類の精査等を課題としていきたい。

【注】

- 1) 「函数」とは「関数」に同じ。1958年、当時の文部省の指導により学術用語の統一が図られたが、「函数」と「関数」は併記される場合が多かった。安部は、1938年に初版が刊行された高木貞治の『解析概論』を高校時代に愛読しており、本書で「函数」の語が使用されていたこともあって後年まで「函数」の語を用いた。
- 2) 安部公房「年譜——『新日本文学全集』に寄せて」、『新日本文学全集 第29巻 福永武彦・安部公房集』集英社、1964年、『安部公房全集18』新潮社、1999年、245ページ。
- 3) 宮武先生傘寿記念事業本部『師の傘寿を記念して』代表千葉胤文、1986年10月、26ページ。
- 4) 2009年7月8日、福井康子氏宅で行ったインタビューに基づく。
- 5) 「よみうり婦人欄」〔赤欄会のピラを学校の掲示板に貼って女高師を追はれた安部よりみ夫人が長編の小説を発表〕「読売新聞」1924年4月2日、朝刊4ページ。
- 6) 「よみうり婦人欄」〔赤操は女の落ち行く開かれ易い地獄の扉／屈辱的婦人の地位をかけた小説『光に叛く』〕「読売新聞」1925年4月11日、朝刊7ページ。
- 7) 注6に同じ。
- 8) 2010年6月3日、岡山市・愛光苑で赤松和子氏に行ったインタビューに基づく。
- 9) 注4に同じ。
- 10) 2009年5月10-12日、井村春光氏宅で行ったインタビューに基づく。
- 11) 「安部公房の『奉天』体験—満洲教育専門学校付属小学校の英才教育を中心に」「東アジア研究」第53号、大阪経済法科大学・アジア研究所紀要、2010年3月、37-53ページ。
- 12) 注8に同じ。
- 13) 辻公平「在学当時の思い出」『奉天千代田小学校創立50周年記念誌』奉天千代田小学校同窓会本部、1977年5月、88ページ。
- 14) 2008年12月10日、児玉久雄氏宅で行ったインタビューに基づく。
- 15) 2010年3月4日、原田静子氏に行った電話インタビューに基づく。
- 16) 「インタビュー」安部公房「私の文学を語る」〔聞き手〕秋山駿、「三田文学」第2期・第55巻第3号、三田文学会、1968年3月、『安部公房全集22』新潮社、1999年7月、39ページ。
- 17) 注4に同じ。
- 18) 注10に同じ。
- 19) 注4に同じ。
- 20) 注10に同じ。

- 21) 注10に同じ。
- 22) 正式には中華民国軍のこと。当時、日本では国民政府軍（国府軍）と呼んだ。
- 23) 赤松和子自筆原稿（タイトルなし、原稿用紙30枚）より、2010年6月3日、面談時に赤松より寄贈された。引用文中、「ラヴレター」とあるのは、公房が赤松に送った書簡のこと。小・中学校時代の公房は赤松に長く思いを寄せており、成城高校に進学した直後、親元から離れた解放感もあったか頻繁に赤松に手紙を書き送るようになった。
- 24) 鈴木衛氏宛て井村春光筆書簡（1946年8月5日-1947年8月まで、全36通）は、2009年3月、鈴木衛氏より寄贈され、2009年5月、井村春光氏と面談時に引用の許可を得た。
- 25) 注4に同じ。
- 26) 井村春光筆、鈴木衛宛て書簡より。便箋2枚、封筒には「北海道上川郡東タカス」「1・11」とある。書面中に「昨年8月頃《俺は一生結婚なぞ……》と言っていた口の下から」とあるのは、そのころ公房が前掲、原田静子に失恋したことを意味している。大学進学後の公房は親友の妹である原田に好意を寄せ、いつきは結婚したいと思い詰めたが片思いに終わった。
- 27) 注4に同じ。

（平成26年11月4日受理）